フィールドワーク心得帖

第31回　岡　奈津子

インタビューは時の運

公務で現地調査に赴くときには、当然ながら事前に計画を立て職場の承認を得る必要がある。土日祝日は「資料整理」にあてることができるが、それ以外は何月何日にどの機関を訪問するのか、計画書に書き込まねばならない。アジア経済研究所の一職員である私も毎回、このようなシステムに従って書類を作成するのだが、一方で「こんなにすんなりいかないよな」とツッコミを入れている自分がいる。

私が現地調査を行う際、一番苦労しているのがインタビューのアポイントメント取りだ。もちろんアポ取りは調査のごく入り口にすぎない。だが（インタビューを含む）フィールドワークを行ううえでの基本的な心構えや注意点については、本連載で先輩や同僚諸氏がすでに多くを語っている。そこで今回は、調査のスタート地点で私が重ねてきた試行錯誤について書いてみたい。

●ドタキャンはあたりまえ

私のフィールドは中央アジアに位置するカザフスタン。ソ連崩壊によって一九九一年末に独立した若い国で、国土は日本の七倍以上（世界第九位）もあるが、日本での知名度はあまり高くない。だが、先のロンドン・オリンピックでは金メダルを七個も取ったので、テレビでその国歌を耳にした読者もいたのではないだろうか。

さて、カザフスタンの人々は一般に、先々の予定を立てそれを守るのが苦手である。というより、一部の例外を除いて、そういう習慣があまりない。私の個人的印象では民族によって若干違いはあるが、予定に対する「柔軟」な考え方は国民性といってもよいだろう。このような行動様式は、プライベートのつきあいならまだしも仕事となるとなかなかやっかいである。直前にならないと具体的な日時を決めてくれない人が多いし、一度決めた予定を変えることもしばしばで、ひとつのアポイントメントをとるのに何度も電話をかけ直す羽目になる。

こちらからお願いするインタビューでは、日時や場所は先方の都合に合わせるのが基本である。たとえば、ある重要人物A氏と月曜日に会うことになっていたが、都合で流れてしまったとしよう。「じゃあ明後日はどうだい？　時間はあとで決めよう」といわれたら水曜日はまるまる空けておかなければならない。他の面談予定を入れてダブルブッキングになったら相手に失礼だからだ。そのあげく当日になって「やっぱり別の日に」といわれると、さすがにがっかりする。さりとて、そんなときに落ち込んでも腹を立てても仕方がない。気持ちを切り替えて、次に進むしかない。

●インタビュー相手の探し方

私はこれまで、主にカザフスタンのマイノリティや移民に関する調査を行ってきたが、インタビュー相手は政治家、社会活動家、民族運動の指導者や官僚、研究者、ジャーナリストなどが中心で、多くの場合、友人・知人、そのまた知人から紹介を受ける方法をとってきた。いわゆる「雪だるま式」である。

しかし昨年以降は日常生活に密着した場面での「腐敗」をテーマに、一般の人々を対象に聞き取りを行っている。昨年は海外赴任の機会を得て現地に滞在していたので、最初は友人や知人のつてを頼って話を聞かせてもらったのだが、このやり方でデータの数を増やすのには限界があった。また、相手が研究者の場合は比較的頼みやすいが、そうでない場合、親しいが故にかえって質問しづらいこともある。

そこで、ある研究機関から社会調査の専門家を紹介してもらうことになった。彼女自身が持つネットワークを利用しつつ、彼女を通じて別のリクルーターにも面談者の紹介を依頼する。自分一人でアポ取りする場合に比べ、このやり方は効率がよかった。また、調査協力者を通じて少しだが謝礼を支払ったので、調査のために一方的に相手を利用しているという罪悪感も

おか　なつこ／アジア経済研究所　中東研究グループ

これまでの主な研究テーマは、カザフスタンなど旧ソ連諸国のマイノリティ、移民、民族政策。現在は現地およびイギリスの研究者とともに「カザフスタンにおける非公式ネットワーク」研究会を鋭意実施中。

軽減された。

ただしデメリットもある。まず、面談者のバックグラウンドに若干偏りが出た。調査協力者はロシア人女性だったが、面談者もロシア人と女性が人口比よりも多くなってしまったのである。ただしこれは彼女のネットワーク自体の偏りだけではなく、日中在宅している主婦のほうがインタビューを引き受けやすかったこと、どちらかといえばカザフ人よりロシア人のほうが、政治的な話題に対してオープンであることも影響していたと思う。

第二の問題は金銭にかかわる点である。応じてくれた方々の大多数は、人の役に立ちたいというボランティア精神の持ち主で、初対面の私との会話にも積極的だった。しかしなかには、こちらの質問に答える気がないのに、謝礼目当てでインタビューを受けたと思われる人もいた。数をこなすことだけが目的のリクルーターが、面談者に調査内容を説明していないこともあった。また面談者の生活水準は、少額の謝礼がインセンティブとして働きうる層にやや偏る結果になった。ただ、このような出会いがなければ、貧困に苦しむ人の話を直接聞くことも、彼らの家を訪ねてその暮らしぶりを目にすることもなかっただろう。

なお、ここ一年ほどはフェイスブックを使ったアポ取りも試みている。話を聞きたい相手に「友達」申請すると同時に、調査目的を簡略に説明したうえでインタビューの依頼をするのだ。今まで四人に申し込んで全員から返事が来た。ただ彼らはみな、そもそも職業柄、人と会うことに前向きな政治家や社会活動家である。またフェイスブック上、私との「共通の友達」が多かったことも、同意を得やすかった理由かもしれない。

●思わぬ出会い

論文に直接引用することはほとんどないが、情報源として重要なのが雑談、かっこよくいえば非公式インタビューである。カザフスタンのようにマスメディアがあまり世論を反映していない国では、いろいろな人と直接話をして初めてわかることも少なくない。また、語り手のホンネに触れられるのも、インフォーマルな場ならではだ。

友人や知人とのおしゃべりもさることながら、世相を知るのに有益なのがタクシー運転手との会話だ。私が二度の在外研究で滞在したアルマトゥには、バスや路面電車、地下鉄（二〇一一年末に開通）もあるが、必ずしも使い勝手がよくないので、私は便利で安価な（あくまで日本に比べればだが）タクシーをよく利用する。ただタクシーといっても、ほとんどがいわゆる「白タク」である。

昨年初冬のある日、私はあるタクシー運転手から、税関における収賄について具体的な話を聞く機会に恵まれた。通常のインタビューで腐敗にまつわる体験を尋ねると、多くの人が、役人や医者などから金銭を露骨に要求されたことについて、憤懣やるかたない調子で話してくれる。「自主的」に渡した場合でも、思いの外あっけらかんと語る人が少なくない。他方、自分自身が受け取った賄賂について話してくれる人はまずいないから、私にとって彼との出会いはきわめて貴重であった。

この「面談者」は三〇代半ばのカザフ人男性。いまは白タクを本業にしているが、以前は税関で働いていたとのこと。そんな実入りのいい仕事をどうして辞めたんだろうと考えていると、あたかも私の心中を察したかのように、彼の方から「税関はみんな腐敗してる。仕事を辞めたのもそのせいだよ」という。いったいどういうことか。好奇心がむくむくと頭をもたげたが、初対面の人に聞くのはいくらなんでも失礼だろう。しかし全く知らない者同士だからこそ匿名性は保証されている。しばらく逡巡したあげく思い切って頼んでみると、あっさりOKしてくれた。その結果、このインタビューは私の手元にあるなかでも、もっとも重要な情報のひとつになった。

なかなか思いどおりにいかない一方で、思いがけない出会いもあるのがインタビューの醍醐味である。事前準備を怠らず、常にアンテナを張り、できる限りの努力をしたうえで、あとは運を天に任せるのがよい、と私は常々考えている。